

南風

みなみかぜ

寺報 第八号

平成二十五年 冬

〒543-0063 天王寺区茶臼山二-三十六

電話 〇六-六七七九-九四三五

〇六-六七九四-〇五八三

携帯 〇九〇-二〇四八-三二八九

真宗大谷派 松濤山 南照寺 (なんしやうじ)

編集 発行 南照寺住職 友澤秀三

かし、表の門の南京錠について追加があります。議事録の通り基本的に、毎朝晩、開閉するつもりであります。事情によりそれが困難な時のために、四ケタのダイヤル式の新しい錠を購入いたしました。

解錠番号は、別紙をもつて報告いたします。

番号は自由に変更できますので、保安上のご意見などがありましたら、ご教示いただきたいです。ちなみに入口の門も駐車場の門も、二つとも番号は同じにしています。

またつい番号を失念した、という場合には、住職の携帯におかけただければと思います。あらためて番号を大書いたします。

090・2048・3289

・来年、一月一日元旦、午前十時より

「修正会」

をお勤めします。どなた様もお参りいただけたら、とお待ちしております。

その間の十一月六日の水曜日に、総代会を開きました。
今回は先の門徒集会の議事録をきちんとしたいということ、倉島の奥さんが十一月いっぱい東京へお帰りになった後の事について、意見をまとめたということであったかと思えます。その詳細については、議事録にある通りなので繰り返しません。いくつか追加しておきたい事柄があります。

・議事録の二枚目の「注2、」にあります「季節的には……十二月二十五〜二十八日、……の繁忙期には不在にならないよう、……」という部分、むしろ二十九、三十、三十一の方がお参りに来られる方の数が多いので、そちらに力点を置きたいと思っております。

・共用していただけるお寺のバケツ、柄杓については、すでに本堂の裏にステンレスの棚を御用意いただきました。配置済みであります。し

この十一月十六日(土曜日)に、いつも通り「お勤めの会」が開かれましたが、皆さまなかなかお時間が取れなかったか、いつもは御参加いただける方も、今回お運びいただけなかったようなことで、少しさびしいことはありません。しかしながら、思いがけず倉島さんの御主人や娘さんが大阪においでになっており、御一緒に正信偈があげましたことは、非常に嬉しく、良かったのではないかと喜んでおります。この先もずっと、第三土曜日はぼちぼちですがとりあえずこんな風にやっています、でいきたいなあ、と思いました。

このところ「親しい人との別れ」が、がぜん増えて来ました。と言つても、相手が亡くなつてしまふという、いわゆる「死に別れ」ではありません。転勤や、転居などで遠く離れてしまつて疎遠になつてしまふ、というのでもありません。親しくしている当人同士については、以前となにも変わらないのに、ある「瞬間」をもつて「別れ」てしまわなくてはならず、以後はすつかり何もなかったかのように互いに連絡することもありません。たまに人づてに消息を聞く程度です。

そんなことがあり得るだろうか、と不審に思われるでしょうが、本当です。

私はこれまで、いくつかのお寺の「法務手伝い」をしてきました。大きなお寺で、手が足りないから手伝つてほしい、というのもありましたが、多くは寺としての業務がだんだん難しくなるであろうという状態の時に「手伝い」を求められて、まったく成り立たなくなつてしまつた後にも、なんとかバラバラに壊れてしまいそうな関係をつなぎとめる、そんな仕事でした。

もちろん、失敗は数えきれないぐらいありました。馬鹿にされたり、嫌われたり、結局私が原因で離れてしまつた檀家さんも沢山あつたように思います。それでも多くの門徒さん方は私を受け入れてくださり、中には私が毎月のお参りに来るのを、心待ちにしてくださいさる方もありました。

こちらもちろん、家の中の事情には通じてしまいますので、娘さんが結婚したと言えば喜び、法事の度に大きくなって戻つてくるお孫さんに驚き、嫁姑などの家庭内でのトラブル、さらに重い病の宣告にショックを隠せないのを見てとつた時には、なんとか寄り添おうと、その都度長い長い話に耳を傾けたりしました。

そして、「今、息を引き取りました」と連絡が入れば枕経に走り、お通夜や中陰で「身内だからこそ知らなかった」陰徳を、唯一物語ることのできる「他者」として、式を執行してまい

りました。そして一周忌、三回忌と法事を勤めていくうちに、喪主だった方の葬儀もまた、私が執り行うこともしばしばありました。

が、その長い間には、お寺側の事情もまた変わつてまいります。さまざまな紆余曲折があつても、ついに「住職」が決まるということになると、それまでどんな風であつたかはともかく、その住職のやり方でお寺は動いて行くようになります。真宗大谷派の宗門も檀家総代衆も、一挙に協力体制を整えるわけです。

そしてある時私に一言、
「来月からここは住職が参ります。」
と言えば、私は「そうですか」と答えて、それですべて事足りるわけです。

そうして十数年、家族のようにごく当たり前に出入りをしていた家の敷居を、二度と再びまたぐことはなくなります。ごくたまに道端で出会つて、懐かしく挨拶を交わすようなことがあつても、もはや以前のような親密さは失われて、元に戻ることはありません。

問題は、そのことがきつかけとなつて、お寺自体から離れてしまふ方も少なくないということです。本人の葬儀も含めた、今後の一切の仏事を任せるつもりでいたのにと、裏切られたような気になつたのかもしれない。私はしかし立场上、傍観する以外になすべき手だてを持ってないのです。何か助けを求めてきても、まずはお手付きのお寺に相談していただきますように、としか御返事しようがありません。

大きな虚しさが、胸の中に広がっていきます。「お前のやつてきたことは、どんな苦勞であっても何の意味もない、無駄なことだったのだ。」と、面と向かつて言われたこともあります。もうこんなに辛いのは、こりこりです。

今年最後の「お勤めの会」は

十二月二十一日(土)午後二時より

南照寺本堂にて、お待ちしております。